

一九八五年の海外の山

多分私たちは、漠然と自覚している以上に、幸せな時代にいるのだらう。海の向うからはいつてくるいろいろな形の地球体験の報を聞いたに、いまこそ個人レベルで思いきり駆け、チャンスを自分でひっぱりこめる時代なのだ、と思わせられる。

結果は明暗を分けたものの、多彩な試みが、一九八五年の登山界にもあった。総じて、派手なものではなく、大声で成果を主張しなくてはならない登山隊はむしろ減っている。外国隊の活動も含め、この一年、海外の山で起きたものをたどってみたい。

まず、八五年をしめくくるようにマナスル(八八六三)からと

びこんだ、快報からはじめよう。

十二月十四日、かもしか同人隊の山田昇、齊藤安平の二人が北東稜からの登頂に成功した。山田は八二一八三年冬にも、日本ヒマラヤ協会隊の隊長としてこの山の冬期登頂に挑んでいるが、隊員の一人がアタックを断念して下山途中滑落死、登頂できなかった。三年後に、借りを返したわけだが、この登頂によって、山田は一九八五年で、最も光を放つクライマーとなった。

七月のK2(八六一一)は、十月のエベレスト(八八四八)に次いで、二度目の登頂に次いで、八千峰を三シーズン連続、いずれも無酸素で登ったからである。K2の前の八四一八五年冬に



1986年(昭和61年)

1月号(No. 487)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 1985年の海外の山……………(1)
図書紹介……………(2)
「日本」「私の槍が岳・山岳写真帖・ネパール百描」「新北越雪譜物語」
今西錦司元会長の日本 1,500 山登頂……………(4)
東西南北……………(5)
「三水会十周年で祝賀会」「銀嶺山に道がついた」……………(5)
報告……………(5)
秋田支部、岩手支部、図書委員会、婦人懇談会、集会委員会
日本山岳会 80 周年記念「山岳文化講座」
静岡支部……………(6)
山岳編集委員会より……………(7)
山研の愛称募集……………(8)
山の気象と気象学 (10)
科学研究委員会……………(9)
会務報告・ルーム日誌・新入会員住所変更など……………(9)~(11)
図書受入報告 図書委員会……………(10)
お知らせ「講演会(医療委ほか)」
「会員懇談会(総務・集会委)」……………(11)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

お知らせ電話

234 六六五九

ククチカとのコンビを解消してしまった。そのクルチカは、来年夏、山田昇らと組んでカラコルムで意欲的な登山をする計画である。

ついでこの間までは、毎年、あるいは一年おきに、ヒマラヤへ繰り出すようなクライマーは、よほどすごい、と私などは思いこんでいた。しかし、ヴェテランたちはいまや、許可取得から準備、行動まで、ほとんど同時進行的に手を打ちながら、季節と季節をつなぐ高峰登山を実現させている。しかも、はじめにふれたように、やるぞ、やるぞ、と騒がずにさりげなく登ろうとする。

坂下直枝を隊長とする山学同志会隊のクレーン合宿は、こうした時代の、新しい試みだった。七人のメンバーがネパールのクンブ山城に一月「合宿」し、タウチエ(六五四二)は、チョラセ(六四四〇)は、アマダブラム(六八五六)は、チョー・オユー(八二〇一)の四峰を、アルパイン・スタイルで登るという計画だ。エクスペディションではなく、日本の冬山合宿と同じやり方を実践、経費もきりつめたものとした。タウチエ、チョラセを二つのパーティに分けて登り、アマダブラムも新ルート(西壁と南西稜の両ルートからそれぞれ三ビバーク、四ビバーク)で登る。冬山合宿と同じやり方を実践、経費もきりつめたものとした。タウチエ、チョラセを二つのパーティに分けて登り、アマダブラムも新ルート(西壁と南西稜の両ルートからそれぞれ三ビバーク、四ビバーク)で登る。

ークで登ったが、その下山中に、中核メンバーの石橋真が滑落死した。このためチャー・オユーは、見送られた。

三つの山の登り方はスピード感にあふれ、「会心の登山」だっただけに、惜しかった。合宿は、一人の遭難死を出す不幸な結末に終わったが、この発想は、今後に継がれてゆくと思われる。

複数のピークをめざした点では山岳同人・青いケシ隊も同じだった。日本側九人、ネパール側三人の合同チームがグルジャ・ヒマール(七一九三)と、チューレン・ヒマール、ダウラギリVI峰の三つの七千峰をねらったが、最初のグルジャ・ヒマールに登頂成功し、下山中に小林昭一隊長が転落死して、登山は中止された。

しかし、複数の山を一度に登ってしまう試みは、すでに八千のジャイアントを対象に数年前から行なわれている。一九八二年、ラインホルト・メスナーら三人が、ガッシャブルムII峰とブロード・ピーク(八〇四七)に連続登頂(メスナーはこの年の春にはカンチェンジュンガ(八五八六)に登っており、一年間に三つの八千峰に立った最初の人間になった)、八三年夏には、シュテファン・ベルナー隊長以下九人のスイス隊がガッシャブルムI、II峰、ブロード・ピークの三座をわずか二十日間で登っている。

八千のピークが並ぶバルトロ氷河の利を活かしてこそできた登攀だが、四十五歳のマルセル・リュディを含む三人は、このわずかの日数の間に「八千峰三座登頂者」の肩書きを得たわけである。

たとえばエベレストが初めて登られるに至るまでの三十数年の期間に較べれば、考えられないほどのスピーディーな登攀が、いまや日常化しつつあるのだ。

そのエベレストだが、八五年は、はやりの言葉で言えば「実年の年」だった。延べ登頂者数が二百人に達したことは、この会報の前号でふれたが、その結果として、五十歳前後のサミッターのがらばりが印象づけられることとなった。

プレ・モンズンに、十七人も頂上に立たせたノルウェー隊には二人の五十男がいた。一人は、あのイギリスのクリス・ボニン。四回目の挑戦で四月二十一日、自身がサミッターとなったボニン。この時、五十歳九カ月十三日、年令で言えば昨年秋季に登頂したチェコのヨゼフ・プントカ(下山途中滑落死)より十三日年長だった。

すでに十年前、隊長として南西壁の初登攀を成功させているボニンにして、頂上の味は格別だったらしい。「登頂した瞬間、泣き出してしまった」と語っている。三年前、チベット側の北稜に

図書紹介



日本

(What I Found in Japan)

Krishna Bahadur

Verna 著

本会名誉会員の竹節作太氏が一九五一年、ニューデリーで開かれた第一回アジア競技大会で、本書の著者クリシュナ・バハドゥール・バルマ氏に会わなかったら、本会のマナスル登山も一九五二年に実現することにはなかったのではないかと思われる。

本書の著者K・B・バルマ氏はその意味では本会にとって恩人でもあるし、功労者の一人でもある。竹節作太氏の紹介状を唯一の手掛りとして、戦後日本人として最初のネパール入国を果たした本会名誉会員西堀栄三郎氏を、パトナの空港まで迎えに出たのも彼であつたし、ネパールの王様に引き合わせたのも彼の努力のお蔭であつた。

彼はクリシュナ三兄弟の中の長兄で、すぐ下の弟のディリー

・バハドゥールは、第一次第二次マナスル隊のリエゾン・オフィサーとして活躍(しかし一九五四年秋のフランス、マカルー隊のBCにて肺炎のため物故)、末弟のラム・クリシュナ氏も天理大学に留学されていたので、ご存知の方も多いと思われる。本書はK・B・バルマ氏が西堀氏ら関係者の骨折りによって戦後最初の留学生として来日し、昭和二十七年から二年間、日本に滞在した時の資料をもとにまとめたものである。

本書の初版は、一九七八年にマヘンドラ国王の日本公式訪問と、天皇陛下の喜寿を記念して、ネパール語で出版されたが、何分にもデバナガリーのため読める人が少く、英訳が待たれていた。この度多数の写真、英文の抄録に加えて、最新の写真や記事も加えて、最新のNepal-Nippon Research Studies Centreより英語版として出版され、さらにこの英訳版は、国王陛下の筑波エクスポ来日前に、タイムリーに日本にも届き、その内容は英文毎日でも紹介され、高く評価されている。

内容は、日本とネパールの共通点をとりあげて、いかに多くの点でネパールが日本に似ているかをあげ、ネパールも日本をお手本に努力すれば近代国家として発展し

うることを強調している。

本会の会員の写真や名前も随所に登場しており、帰国に際しての送別会の寄せ書きも収録されている。なつかしい。

一九八五年Nepal-Nippon Research Studies Center 発行 変形四六版、30p+98p 写真五十六葉。希望者は本会事務局に申込み二二〇〇円(送料三〇〇円別)で入手できる。(松田雄一)

私の槍が岳

穂苅 貞雄著

山岳写真帖

山下喜一郎著

ネパール百描

内田 良平著

数多くの山岳写真を撮り続けている写真家三人が、四月、六月、八月と二カ月置きに写真集を出した。

「私の槍が岳」(朝日新聞社、四三〇〇円)は穂苅氏が、三寿雄氏に培われた槍が岳を視る眼で、四季折々、近くから或いは遠くから、三十数年間槍が岳を見続け、撮り続けてきた末の写真集である。ページを繰る手を

消えた仲間のピーター・ボードマン、ジョー・タスカーのことを思い出し、登頂には喜びと悲しみが交錯したという。

九日後の四月三十日、裕福な米人実業家、ディック・バスが登った。年令、五十五歳四月九日。南極のビンソン・マシフ(五一四〇)を含め、七つの大陸の最高峰全てに登った瞬間だった。

テキサスでスキー場や牧場を経営するバスが七つの大陸の山を全部登ってしまったと思ひ立ったのは八二年である。大学時代山登りをした以外は多忙な実業の世界に身を置いていたバスは、友人のワ

・ヘイの写真に石をくくりつけベットの側に投げたという。日本隊は、長谷川恒男隊が夏、今井通子隊が冬、それぞれチベットの北壁ルートをめざしたが、長谷川隊は北東稜にまわったパーティの一人が表層雪崩にやられ、断念した。今井隊は、ネパールからシェルパも加えての再挑戦だったが、結局八四五〇地点までしか届かなかった。

南面からは、八木原昭明隊長以下「植村直己物語」撮影隊の登山チーム七人が十月三十日、東南稜からそろって登頂した。冒頭の山田昇もその一人で、山田以外は酸素を使った。二人が凍傷を負い、ヘリでカトマンズに運ばれたものの、過去エベレストに登頂した日本隊九隊のうち最も登頂者の多い隊の実績を残した。ちなみに、エベレストのつべんに過去一番大勢のクライマーを送りこんだのは、ボニントンやバスの加わった前述のノルウェー隊である。同じポスト・モンスーンでも、無酸素登頂をめざしたインド陸軍隊は悪天候に八千二百メートルの高所で七人が孤立、四人が死亡するという悲惨に見舞われた。

八五年は、エベレストに立った者が通算二〇〇人を超えた年(十二月月号会報で二〇一人としました)が二〇五人に訂正します)として記録された。多くの登頂と遭難が、これから

急がせないものが各所に見受けられる。「山岳写真帖」(山と溪谷社、三八〇〇円)のほうは表題のとおり一つの山だけでなく、北アルプスの全域を幅広く、四季にわたって把えており、見る者の心を楽しませる。中には「私の槍が岳」にあるような情景を、時には山下氏のほうが技術的に数段勝れているのでは、と思わせるような把え方をしているものさえ見受けられた。

前者では近藤信行氏、後者では高田宏氏と、同時期に大佛次郎賞を受賞した作家が解説や序文を書いてくれているが、小島鳥水を扱って賞をもらった作家と、大言海編集者を扱って賞をもらった作家とは、山を語る内容に自ずから差の出るのは致し方ないことだろう。

新北越雪譜物語

小倉 厚著

写真家の山下氏が綴る随筆はどれも臨場感があって面白かったが、その場面を捉えた写真は一枚もなく、この点の足りな

上越新幹線の開通以来、新潟県の魚沼地方は、東京のスキーヤーにはますます近い日帰り圏のスキー場と化して、シーズン中は、た

地塩沢町出身の鈴木牧之が、豪雪に埋れて生活する地域の様子を天下の人に知らさんものと『北越雪譜』をしたためたと同様の気概をもって著したのが、この著作である。著者はこの書の冒頭で、「傍観者の立場の人が美しい文で綴ってもそれぞらしい、実際にこの地に住んで

この本を著すに至った自分の立場を述べている。

この点「ネパール百描」(小学館、三〇〇〇円)では写真と随筆がうまく噛み合っており、著者の主張もあって、面白く読

ねし冬の日は、この地に生活する人々にとっては、苦難の灰色の日であることを、彼等のうちの何人が知っていることだろうか。

この魚沼の地六日町に生を受けた著者が、近世末期に同じくこの

語られ、読者にヒシヒシと伝えられてくる思いである。

図書紹介

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

も世界最高峰にはついてまわらう。ポニントンが言うように「エベレストのつべんに立てば、まさに世界の頂点にいる気分になれるから」だ。それは、ひと目、青い地球を見てみたいと思う気持と、どこか共通しており、他のジャイアントとこの山を分ける強烈な要素である。

日本の四隊を含む十二の隊が殺到したナンガ・パルバットの大盛況など、個々の山についての話は、あげ出せばきりが無い。しかし、「魔の山」といわれたナンガ・パルバットのディアミール壁で、同じ固定ロープを使うため登りと下りの隊が交通整理しあいながら登降した、などと聞くと、やはり驚いてしまう。エベレストに女性第三登を果したワンダ・ルトキエビッチらポーランド女性隊も見事に登頂した。

ところで、八五年の海外の登山の特徴の一つは、探検的要素を残した地域での活動が目立ったことである。

前年の偵察行とあわせた日中友好ナムナニ峰（七六九四）合同登山隊もその一つだ。聖山カイラス（六六五六）とマナサローワル湖の景観に長い間あがれていた人もいるだろう。登山行為そのものよりは、地域全般への関心がかうした山には優先する。

日本ヒマラヤ協会などが許可を取ったチベットのギャラ・ペリ峰

（七一五〇）には偵察隊が出た。ヒマラヤを貫くヤルツァンポ（ブラマプトラ川）の大湾曲部をはさんで未踏の最高峰ナムチエバルワ（七七六二）と向いあうこの山も、地形的、自然環境的にきわめて興味ある地域だ。

中国の対外開放政策もあって、青海省の黄河源流域、長江（揚子江）源流域の山にも、それぞれ日本から探検隊、登山隊が出た。いずれも登山よりは、探検行動や調査内容にひかれるエリアである。

ブータンの山が、八五年に人気を集めたことは十一月号の会報でふれた通りである。こども、山自体もさることながら、情報が少ないために山の位置、高度などを自分たちである程度確かめなければならぬ。千葉大隊の登ったナムシラのように、位置はわかったが、高度（一応六五〇〇）とされていた）が公称よりだいぶ低い、という報告もある。こういうエリアに入ることができるのは、私たちの時代の、「ぜいたく」というものだろう。

だが、山々で、いろいろな試みがなされる一方で、幾多の貴重な生命が失なわれている現実がある。経験も技術も、気迫も体力も十分あると思われるような人が、八五年にも何人か帰らなかった。南米アコンカグア南壁に登ったまま行方を絶った和田昌平ら三人をはじめ、昨冬のナンガ・パルバツ

ある年の春、この著者の生家を訪ねて、老いたご両親から受けたおもてなしの暖かさと同時に、郷土をはなれて、東京で一かどの地位を得ておられる著者が、今でも冬には度々雪掘りのため帰郷されているということを開いて、その孝行心の強さにいたくうたれたものである。ま

ト以来の山学同志会隊の遭難死が、中でも目立った。

どうしてなのか、いつの頃からか、私たちはこうしたヴェテランの遭難死に驚かなくなりつつある。困難な登攀にこれだけの人が挑戦すれば、時に死ぬのはやむを得ない、そんな気分がいつの間にか私たちの中に広がっている。そのとらえ方はちよつとおとなびて、かつこう良さそうだが、多分、逃げていいるのだと思う。本

今西錦司元会長の

日本千五百山登頂

挙です。

十一月三日、快晴の「文化の日」に、六年前の文化勲章受賞者でもある元会長今西錦司さんは、奈良県吉野郡川上村の白鬚岳（しらひげだけ、一三七八）に登頂し、「日本千五百山」を記録しました。中学生時代に「山城（京都府）三十山」をはじめてから七十年、八十三歳にして成しとげた壮

さにこの時の感想が、今回の読後の感想でもあった。さりげない文章の中に、彼の熱烈な郷土愛と人間性があふり出されているといえよう。「天は二物を与えず」というが、雪国の冬の生活が冷たくきびしいものであればあるだけに、人間の心はその分だけ温味があるものだということを教えてくれた。

は、ずい分みつもまないヴェテランの死もあるかもしれないのだから。

一九八六年、メスナーは念願の八千峰十四座登頂を果たすかどうか注目されるだろう。そのうち最年少無酸素登頂者なんというのも出てくるかもしれない。しかし、世間から何の喝采も浴びない山登りというものも、また良いと思うのである。

（江本嘉伸）

この著作は郷里の人々にはかなりの反響を呼んでいるらしいが著者の意図は雪国を知らない人達に一人でも多く読んでもらいたいということにある。斯様な人達に一読をお薦めしたい。

昭和六十年九月十五日、岳書房刊、定価一八〇〇円

（小塩丘平）

存知のことと思います。

四、五十歳の働き盛りは、もっぱら探検に打ちこんだ今西さんですが、戦後間もなく「日本五百山」を念願し、コツコツと登りました。これを一九六四年、六十六歳で達成するや、その後は高齢をもとめせずに、ますますペースが上がり、一千山、千三百山、千四百山と、各地の支部の方々の協力を得て、全国の山の巡礼が続いています。

今回の白鬚岳は、今西さんがかねてから目をつけていた山で、この日にそなえて、地元山彦グループが偵察や登路づくりに尽力されました。前日の二日夜、今西さんはじめ関西や岐阜などから記念の山行にと、約六十人が山麓の柏木の旅館に集合。新聞・通信五社、テレビ五社の報道陣も加わって、にぎやかに前夜祭。

三日、早朝に宿を車で出発し、高度八百五十の林道の終点へ。午前六時半、歩きはじめ、植林におおわれた北尾根を登りきって稜

線に出ると、対岸の大峰や台高の山々は紅葉のまっ盛り。落ち葉を踏みしめながら、午後零時四十分、山頂に。約八十人にふくれあがった山仲間や報道関係者に拍手で迎えられ、三角点にふれると、今西さんも、おもわず笑みがこぼれました。つえを振りあげ、いつもの登頂のバンザイ三唱に続き、千五百山を祝ってさらに三唱。頂上で、しばし祝宴が続きしました。下山の途中にすっかり日が暮れ、足もとにライトを浴びながら、林道着。その夜の宿での祝宴はいっそう盛りあがり、今西さんは一人一人に酒をついでまわっていました。なお、この日のマスコミのインタビュに今西さんは「もうこんなアホなことやめや」といわれましたが、これは数え求

めて登るのはしない、ということ、その後もあいかわらず登っておられます。

参加者 秋野子弦、朝倉英子、東司、岩坪五郎・吟子、宇治日出二郎、遠藤克昭、遠藤恵太、小野季子、大江直義・加子子、大川恒、賀嶋増造、国枝武喜、慶佐次盛一、近藤薫、佐藤正雄、斎藤惇生、斎藤清明、神原雅晴、坂井久光、酒井幸子、阪上義次、四手井靖彦、信谷政治、田中節子、高木基揚、玉岡憲明、戸石二生、中前余志子、西川顯、羽澄俊裕、畑林清子、平林芳夫、東真澄、本庄真、松井辰彌、松浦勇次、水野美代子、三浦伝明、森本市郎、森本陸世、山上皓一郎、山口政一、山下余志子、吉村健次郎他。

(斎藤惇生)



東・西 南・北

三水会

十周年で祝賀会

三水会も発足以来、今年で十周年を迎えることとなった。

発足は昭和五十一年五月、中保さんが、会報三六二号で三水会に

ついてと題し書かれていたので、興味のある方はお読みいただきたいが、若干引用させてもらおうと、「誰もが気楽に集れて、気の分かった人たちが肩のこらない話し合いつける場が欲しい。こんなのも必要ではないだろうか……」と、毎月第三水曜日(八月は除く)、同年六月から集会を持つところとなった。以来、集会は一六〇回を数え、メンバーも一五〇人を超える大世帯となった。

祝賀会が去る十月十五日、神楽坂の東京都教育会館で開かれた。当日の参加者は約六十名。中保さんに司会をお願いし、山岳会恒例の物語者黙祷も行なったが、その中に発起人の一人である折井健一さんの名を加えなくてはならなかったのは寂しいことだった。折井さんは常日頃「新しい会員にとつて古い会員はなかなか近寄り難いが、三水会はその点、こたわるところがないのが特徴」と口にされていた。

坂倉登喜子さんが「地道な活動が続いたことを誇りとし、さらに親睦を深め、息の長い三水会に」と開会の挨拶、次いでこれも発起人の一人である錦織保清さんから沼倉寛二郎さんに、発足以来のご苦労に対して感謝状と記念品が贈呈された。沼倉さんの尽力なくして、はたしてこの祝賀会が持てたであろうか。

セレモニのあとは、今井喜美子さんの乾杯音頭で祝宴となったが、片岡博さん、西丸震哉さん、松田雄一さん、安彦六郎さんが祝辞に立ち「親睦を深めながら十五年、二十年に向ってさらに発展して欲しい」と述べられた。

宴たけなわには佐々保雄前会長も駆けつけ「本当にいい会、こんなうまい酒は久しぶり」と語られるような拍手を呼んだ。

記念品はJACマーク入り特製のワッペン。受付を担当した岩堀

瑞子さん、荒野康子さんから「この仲間が一人も欠けることなく、十五周年、二十周年を迎えましょう」と、参加者一人一人に手渡された。

斎藤健治さんには筆で、広羽清さんにはカメラで裏方を務めてもらったが、三水会らしく一体となった祝賀会となった。

祝賀行事は、十月二十六・七日の「十周年記念山行・雁ヶ腹摺山」に引き継がれた。(高田真哉)

飯崎山(二〇八九・七メートル)に道がついた

戦国の武将佐々成政埋蔵金伝説で有名な飯崎山に通ずる登山道が完成した。

今まで途中の大品山(一四〇四メートル)までは二つの方向から登った。その一つは極楽坂スキー場果営ゴンドラリフトの終点から瀬戸蔵山(一三二〇メートル)を経て大品山へ至る大品山自然歩道で、いま一つは栗栗野スキー場から発電所の導水管沿いに大品山へと工事用路跡をたどる道である。その二つが合する辺りから飯崎山の頂上へ向って新しく登山道が造られた。延長三キロメートル余の急坂の続くこの指導標の完備したコースは四季を通じて愛用されることになるだろう。

この道がついたことによって独立峰としての飯崎山の活用度が高

報告

白子森山行

秋田支部

昨年二度目の当支部山行は、去る十一月十日、秋田の中央部に位置する太平山地の最高峰・白子森(一一七九・一米)において実施された。

白子森は、これまで整備された登山路がなく、その上、アプローチも長く、この山地の最高峰でありながら登山界から見放されていたが、一昨々年、井出舞の奥地、山頂直下まで、年々延長されていた林道が完成。これに伴って、地元では新コースとして開発計画中であつたが、たまたま山頂付近で遭難事故が発生し、その遺族や仲間が供養として尾根上を刈払い、登山路を造ったことで、にわかに注目されてきた山である。

また、江戸時代に金掘りの掘った坑口やその住居跡地、墓石等が残っており、歴史的にも面白い山である。

午前七時、岡田支部長宅を車で出発し、途中で会員を拾いながら集合地の井出舞園地に八時到着。県南県北からの会員と合流し、一路井出舞林道をさかのぼる。

小堤沢を過ぎた所の駐車場は、既に登山者の車で満車。天気は曇りから雨となり、万次郎沢左手の尾根登口に九時取り付く。

急斜の尾根道は刈払いの足場が悪く、その上、高令者が多いとあって仲々進まない。ブナ林の続く中を暫く登り、小熊森への尾根分岐に十時頃到着したが、一面ガスと雨で眺望出来ず。

前後して地元の高校山岳部や山岳会が入りまじり、近頃では珍しいほどの入山ぶり。これも数日前に新コースとして新聞で紹介されたためらしい。

ブナ林の続く尾根を更に登って行くと郡境に出、やがて灌木帯となる。鞍部に出ると遭難碑のある休憩地があり、左下方には水場もある。

ここから急な尾根を登って行く。熊笹帯となり、旧道と交差してまもなく山頂の一角に出る。そのまま北進して三角点のある山頂に午前十一時到着する。

速足組は既に昼食中。雨もまだ強くなり、昼食もそこそこに記念撮影の後、下山開始。支部山行は、実施のたびに雨又雨でいつも忙しい。

午後二時三十分、最終グループの到着を以て無事終了、次回の山行を約して解散した。
参加者 岡田光行、進藤 昭、佐藤兼治、柳谷正義、藤原 健、加賀谷昭一、北林嘉鶴子、高橋 守、

打矢道雄、今野昌雄、小笠原義雄、橋浦広吉、成田 洋、加賀谷功、佐々木民秀ほか会員外十名。計二十五名
(佐々木民秀)

かぬか平例会と

特別晩餐会

岩手支部

・かぬか平例会、オース岳

十月二十六日、満月山行は川井村、立丸峠の麓。セリで牛もいない新田牧野看視小屋でジンギス汗鍋が始まる。暖まると周囲のシブキの間からカメムシの大観迎、雲間からの月光で妖しくさわいだ。

十月二十七日、地竹が多い所で、オージ竹が訛ってオース岳になったもの。ヤブを覚悟で登るパーティと迷いが、昔話の舞台の白身山と、周水河現象の見られる長者森のタモン・タワーから新雪の早池峯を見る別動パーティとに分かれ、登頂後、遠野市、代表的な曲り家民家、千葉家にて直会ののち散会。

参加者 阿部国雄、田鎖 寿、石村 実、石村夫人、和田庄司、松田和弘、佐藤敏彦

・六十年特別晩餐会

十二月五日、盛岡市、藤田食堂上段の間で、会友のチベットのラマ僧のロブサン・サンボーこと、西川一三、ダウラギリの鈴木 茂(網張ペンション)、五太水河と

……日本山岳会創立八十周年記念・静岡支部主催……

「山岳文化講座」

東京と名古屋の二大都市の中間にある中都市静岡市は、文化レベルの低いことがなんとなく通説となり、市民自身もみずからそう認めているふうがある。

しかし市内に住んでみると万事につけて保守的ではあるが、市民自体の文化文明のレベルは決して低いとは思われない。今回は比較的内容がむずかしい講演を中心とした登山文化に関する講座を、静岡の登山愛好家と一般市民を対象として開催した。

静岡市立中央図書館と共催、場所中央図書館ホール、日時は九月七日・十月五日毎週土曜日午後二時より四時半まで。
結果は毎回五〇〇人前後の来場者あり延人数三〇〇人近くが受講した。五日間のうち四日間が雨模様で出足がにぶかったようである。

講座の内容は次の通り

第一日(九月七日)「登山と文化」講師千坂正郎氏
文明と登山との関連の歴史的展望の説明のあと、現代社会のなかで登山がどのように発展し評価されていくか、将来にふれた話を約一時間半行なった。そのあと会員川森左智子さん提供

の一六ミリ映画を映写した。

第二日(九月十四日)「山名の由来」講師山本朋三郎氏

中部山岳地帯の形成の歴史と山名が生まれていく過程の解説。山名はその土地に住む人びとの生活のなかで生まれていくべきで、登山家、学者など他所者が入ってきた勝手に山名・地名をつくりあげたことは、つしむべきであることを強調された。

そのあとの映像はスライド「富士絵の歴史」を映写した。

第三日(九月二十一日)「登山とマラソンの医学」講師田辺恵造氏

整形外科医の立場から、人間行動が肉体に及ぼすメカニズムの説明を行ない、体内の状態を外部から知る指標として呼吸数、脈拍数あるいは血圧を取り上げ、自分の年齢に応じた標準数との比較を常に頭において、中高年者は登山やジョギングを行なうべきことを懇切に話された。

映像はスライド「アルプス絵画史」映写の予定であったが時間がなく後日にまわした。

第四日(九月二十八日)「探検と登山」講師安間荘氏
大航海時代といわれるヨーロッパの植民地獲得競争より生まれた探検の思想と行動、それと併行して生まれ発展してきた近代登山精

神の歴史、現代登山と科学との関連について解説された。

映像は「カラコルムの花」スライド映写、静岡大学のカラコルム学術登山隊に参加した大石静大助教授の解説で、氷河にかまれたオアシス、満々と水をたたえた氷河湖が一夜にして堆石地に変る話などが面白かった。

第五日(十月五日)「メスナ

ーの世界」講師横川文雄氏
第一日より第四日までの講師は会員で静岡在住の方々であるが、横川上智大名誉教授のみは東京よりお呼びした。

世界の登山界にいろいろ話題を提起しきょうほうへん半ばするメスナー氏とはどんな人間かについてお話願う。講演のあと本部より借りた一六ミリ映画「ヒマラヤへの道」を映写、五日間の講座を終了した。

講座終了後、有志で横川教授をかこみ酒杯をかたむけながらメスナー氏について懇談した。五日間の文化講座は地方都市としては異色の講座となり成功したものと思うが、市立中央図書館の後援と、本部より積極的な援助があったことに感謝申し上げたい。

(西郷正郎)

シア・カンリの二上純一、K2の小野寺正英の諸氏らを混えて、ハイレッドな話題と、名物の肉豆腐、チベットの茶等を、ローグレイドの会費で大賑いだった。

出席者 西川一三、鈴木 茂、阿部国雄、田鎖 寿、石村 実、石村夫人、中谷 充、菊地修身、近藤有慶、小野寺正英、二上純一、佐藤 正、棚田房男、和田匠司、関口 宏、宮 伸穂、立花幹雄、松田和弘、畠山 優、中西栄三、中西夫人、子供二名、川島弘也、佐藤紀子、佐藤敏彦、以上二十六名 (佐藤敏彦)

第18回

図書交換会

図書委員会

昨秋十月二十六日、恒例の第18回図書交換会が本会ルームにて行なわれた。

今回は、会員十六名から三〇一点が、また昨春物故された前図書委員長山崎安治氏の蔵書から四四七点、合計七八八点の和書・洋書・雑誌が会場いっばいに出品展示

「山岳」編集委員会より

〔訂正〕「山岳」八十年の口絵のうち、「御茶の水のクラブ・ルーム」右ページ二枚の写真、提供・関口令安は、関口周也の誤まりです。ご迷惑をおかけしたお二人におわびして訂正しま

された。なお、故山崎安治氏の蔵書は、ご遺族のご好意により会ならびに図書委員会に寄託され、現在も分類整理を継続中であるが、取敢えずその一部が出品されたものである。

出品図書の内容も、先達が書き遺してくれた明治・大正期のものから新刊書に至るまで、しかも紀行文・随筆・登山報告書・研究書・技術書・案内書・写真集・大学部会報等々、山のさまざまなジャンルにわたっている。価格も五〇円から数千円のものまでとりどりであるが、大半は二、三百円ないし千円未満の手軽な値段がつけられており、読書家・愛書家にとっては願ってもない催しとなった。しかしそれ以上に、日頃山岳書とはかく縁遠い会員にとっても、さながら登山の、山岳文化の歴史を一堂に垣間見ることができただけで、けっして無駄足にはならないと思う。まだ一度も出席されていぬ会員には、次回には気楽にぶらりと足を運ばれることを、ぜひここでおすすめしておきたい。入札対象図書は四点ほどあり、

す。

また「K7」の写真のうち、△K7の全容・チャラクサ氷河より▽の写真撮影は「J. N. KAMURA」氏。

「山岳」担当

深田久弥『ヒマラヤ——山と人』(底値三千円、応募者三人)が五六五〇円で、また百瀬慎太郎『山を想えば』(二千元、七人)が一萬二千元で、上田哲農『日露の山 HINATAの山』(六千元、一人)が七千元で、「三高山岳部報告(第五号)」「(三千元、一人)」が三千五百円で落札する珍事となった。

総売り上げは五五五五分、四三万一千八百円で、規定によりルームおよび図書委員会に各一〇%ずつを寄付いただいた。相変らず常連の会員がめだつたが、来会者は四十名であった。

ところで、毎回、一カ月余りの準備作業に陣頭指揮をとられ、会場でも出席者の質問に気軽に本の解説をして回っておられた山崎安治氏の姿が見られないのは、誠にさびしいかぎりであった。今回山崎氏蔵書を手にされた会員諸氏も、それぞれに想いをあらたにされたにちがいない。紙面をかりて、あらためてご冥福をお祈り申し上げる。

なお、出品者は山崎家のほか左記のとおりである(順不同、敬称略)。出品者各位には厚く御礼申し上げます。

(小川益男)

三田幸夫、織内信彦、橋瓜幸達、加治川栄二、中村小一郎、砂田定夫、石川治郎、阿部和行、村松紀夫、鳴原啓佑、国見利夫、雁部貞夫、岩瀬皓祐、大森久雄、松家晋、織田沢美知子

十月の鳥海山

婦人懇談会

鳥海山麓にある岡部みち子さんの山荘をベースに、山行を企画しました。裾野をめぐる探勝組、鳥海山に登る組と二グループに分かれてのそれぞれの報告です。

鳥海山麓探勝の旅

鳥海山麓の岡部さんのお宅をベースに、「雨が降っても槍が降っても山頂を目指すはりきり組」と、雨を見越して「山麓の紅葉鑑賞に終始する怠け優雅組」が吹浦下車。はりきり組は、折から日本海を東進中の三つの低気圧にもめげず、鶴岡から参加の佐藤節子リーダーのもと大平へ向った。優雅組は地元、林さんのご配慮で二台の車に分乗、小雨の降り始めた吹浦をあとに鳥海山麓東半周ドライブに出発した。以下は優雅な旅の記録である。

黒く荒れた日本海を左手に十六羅漢を過ぎ象潟通過。雨脚が強くと、花立の展望台から鳥海の姿は全くない。しかし、矢島、駒花王子と中腹の紅葉が雨に鮮やかだ。今日の最高到達点五合目の抜川は、冷たい雨と風が吹きぬけていく。頂上へ向った仲間はずっとブツブツ言っているに違いない。寒さに追われて車へ戻り、百宅へ向う。東面もみごとに紅葉であっ

た。法体の滝では雲が切れて時々陽がこぼれるが、鳥海山は相変らずすっぽりと厚い雲の中だ。滝の上へ登って美しい紅葉と三段の滝を鑑賞。茶店であけびの籠をみつけた。素朴で安いところが全員気に入って大量注文、婦人懇談会で直販売することになった! 百宅の国民宿舎で昼食後、帰途につく。果実酒用の野生のホップの収穫があった。

夕刻、遅れて到着の穴田さんに加え、芋煮会用材料や新鮮な刺身、焼魚を大量に積み込んで駒止の小松さんの小屋へ向う。雨は時々激しく、気温がひどく高くなった。夕闇の中をずぶ濡れの山頂組が到着。悪天候にもめげずに頂上を極めたという。

ランブとろうそくの中で芋煮会の大鍋も煮え、地酒で賑やかな夜を過ごす。はじめてこの小屋に来たのはジャコビニ彗星が見えるという夜で、亡くなられた深田先生の奥様もごいっしょだったのを思い出す。今夜の招かれざる客は、捕っても捕っても現れるカメ虫の群でありました。

今回は林さん、佐藤さん、畠山さん、また翌十月十一日、月山へ向ったはりきり組には村上支部長がおつきあい下さるなど、地元山形支部の方々に大変お世話になった。鳥海山には全くとお目にかかれなかったが、山梨からも二名の参

加があり、楽しく、思い出に残る旅であった。

— 悪天の島海山登山 — (山口節子)

十月十一日夜、吹浦の岡部家では四人の先輩組が歓談中で、地元、林会員のお手の物の山野草の果実酒や、龍宮城の見本のような豪華な魚の吸物、焼物、刺身と、山海の幸でテーブルはばいであつた。

黄河源流トレッキングでご一緒だった小原さんと再会も嬉しく、思い出話などあれこれと語りあう。明十二日、先着の方は山麓めぐりの由、天気を気にしながら就寝。

山研の愛称募集

新築されて十年ちよつと。山研と呼ばれて会員とその関係者の皆さんに親しまれて来ましたが、より一層皆さんに親しんでもらうために、今回愛称を募集することになりました。

『上高地山荘』と呼ばれていた時もあつたようですが、「山岳研究所」と言う現在の呼び名はちよつと堅苦しい」とのご意見もあり、そこで、会員やその関係者が自由に休憩したり、宿泊出来る施設であることを理解していただく意味で、それにぴったりの愛称を会員から募集する

翌朝、後発の方四名を駅で出迎え、すぐブルーラインを走る。大平登山口を七時四十三分に出発。

視界もまだよく、海岸線も紅葉も眺められた。しかし登るにつれガスの中となる。風雨になりそうな空を案じながら御浜小屋に着き、朝食。二名の学生が泊りで、今日は停滞の由。嚴重に支度をして十時十五分出発。二名の方は御浜で下山するという。突風まがいの風、勿論視界は0。雨は大したことがないので、ゆっくり登りながら頑張ろうとはげましあう。千蛇谷に入ると風あたりもなく、建

上高地山研運営委員会

ことになりました。

採用の愛称は61年度の開所時より使用させて頂き、山研にネームプレートとして取り付ける予定です。

素晴らしい名前を付けて下さい。

〔募集要項〕

- 一、「愛称」はハガキで、山研委員会までお送り下さい。
 - 一、締切は六十一年四月末日
 - 一、会報六月号に結果を発表します。
- 採用分には、山研委員会より薄謝を差し上げます。

物に入り腹ごしらえ。今回の山頂は七高山だけとして十二時四十分出発。山頂には雨具もつけていない若者が一人。下界、抜川方面は太陽がでていゝとのこと、風も弱くなったので外輪を下る。途中、御浜小屋に寄り、大平口着四時二十分。

今夜の宿舎駒止山荘に向うが、雨はまだ追いかけてくる。小屋で山麓めぐりの方々と合流。夜はまたもやお代り無制限の山形の芋煮と山海の幸。ろうそくの灯のもと夜のふけるのも忘れ、婦人部懇談宴はつづいた。

翌十三日の有志による月山登山も悪天候で、九合目で引返しとしか……。山は、なくならない。再度、出羽の山々においていただき

(佐藤節子)

参加者・敬称略

松井美恵子 山田靖子 岡野弘子
小原晴子 前田清子 小林基子
増田洋子 早川瑠璃子 穴田雪江
山口節子 岡部みち子 畠中六左
エ門 林稔 佐藤節子

現地小集會

集會委員会

碧岩・大岩

もう一つ良い天気恵まれなかつたものの、集會委員会主催、碧岩・大岩山行は思いがけないハプニング有りて楽しい日帰り山行で終つた。

十月十日、下仁田駅九時半集合。皆揃つたところで、車、タクシーにそれぞれ分乗し勸能へ。着いた順に木々の影の中を三段の滝まで登って行く。全員集りしばらく行くと道がない。目の前は伐採地、勢い良く伸びた雑草荒れ放題の急坂だ。誰が藪こぎ山行になると思つたらう。悪戦苦闘、山女の白い肌に赤い線が何本か走る。

「いてつ、何、このトゲ！」全く山女は可愛いくない。気にせずガツガツ、しかも楽しみながらドン登つてしまふ。だがさすがに時間をくってしまったようだ。碧岩の少し手前で、着いた順に昼食をとりはじめる。終えた者から空身で碧岩頂上へ。「あつちはまだ紅葉がきれい」、今から向かう大岩が立ちのぼる。今から向かう大岩が立ちのぼる。今から向かう大岩が立ちのぼる。

近くに見えていたはずの大岩、結構な距離である。藪こぎで思いもよらぬ体力消費のため、五名程は途中見はらしの良い所で大岩頂上を諦めた。大岩頂上。「えっ、あそこを登つて来たの?」桂林の山のような形をした岩のトガつた山が見える。新井リーダー曰く、「碧岩つてのは登つた後に見て、あーあんなすごいところを登つたのかとうれしくなつてしまふ山なんです。だからちよつと登つたいたわけ、きつねにつままれたような思いを後に下山。いや、つままれていたのか途中道に迷う。かなりの時間を費しあちこち歩き

まわつてみたが、先の藪こぎで時間がかかつてしまったこともあつて、もと来た道を引き返すことにした。行きに藪こぎをした場所、本来の道を探し当てて下る。三段の滝に着いた頃には日はとっぷり暮れ、懐中電灯のお世話になる。(その後、これは集會山行の特質となる)

沢沿いに歩き、きのこを見比べ、藪こぎに奮闘し、あげくの果てに道に迷い、最終的に懐中電灯で下山という思いがけないハイキング。

私個人は楽しみながら行動していたものの、歩行時間一五時間というこで、参加された会員の方々は表には出さないが、さぞかしお腹立ちだろうとずっと思ひながら時を過した。勸能にやつと着き、置き放しにしておいた車の横で月を見上げながら、楽しかった一日の溜め息をついた時、皆が口々に話しているのが聞える。

「色々あつて楽しかったわね」熱いものが込み上げてくるのと同時に、「お見逃し致しました」と浅はかな自分を恥ずかしく思つた一日であつた。

参加者 梅野淑子 高澤英雄 広羽清 久保孝一郎 砂田定夫 船木威志 中島伊平 柴田初子 矢作有子 内山脩一 佐藤征郎 齊藤桂 神戸恵子 齊藤晋 山口曉 入沢郁夫 新井陽一郎 神山良雄 若林幸子 藤田礼子 継松久美男

菅原広男 小川敦子 中沢光江
嶋崎直忠 尾崎章 尾崎陽子 佐藤皆子

山の気象と気象学 (10)

九月十二日(木)午後六時半より日本山岳会
ルームにて。スライドによる富士の笠雲と傾
度風、五〇〇mb天気図などについて最終回の
講義を大井正一会員より受けた。



雪の見方 富士山特有の笠雲。(1)オホーソック高気
圧の梅雨期に現われる多重笠 (1)冬の乾燥した日
の離れ笠 (2)梅雨季の渦動
吊し雲 (3)秋に多
い翼雲 (4)富士山から吹下
った気流が山中湖で水蒸気
を吸収して不安定となり生
ずるジャンプ雲、この時風
下の西丹沢で集中豪雨が起
る。(5)冬、風の強い時現わ
れる旗雲 この時滑落事故
が多い。以上の五種類に分
類される(図参照)。これら
は河口湖方面からよく観測
され、吉田市からだとも高積
雲に見えることもある。

富士雲

出現理由は(1)西風が中ア、
南アを越える間に摩擦で整
流される。(2)上層七〇〇mb
以下が谷前面で西南西とな
り、黒潮暖流の水蒸気を運
び込む。(3)会報既号のスコ
ランパーScが富士山頂の
高さで正、その上下で負。
などである。

傾度風 低気圧性の場合
はコリオリカと遠心力を加え

(佐藤皆子)

「山」四八三号のお知らせ欄に

米沢

たものが、気圧傾度力と釣り合うので、風は益々
強く等圧線は混んでくる。高気圧性の場合、気
圧傾度力と遠心力を加えたものが、コリオリカと
釣り合うので、風は強くなれず等圧線は粗くな
る。しかし山では移動高の前面で、すなわち晴れ
る前に風雪の烈しくなることが多い。

五〇〇mb高層天気図の見方 空気が周囲に散って
薄くなるのを水平発散、集まって来るのを収束と
いう。高気圧だと下層が発散、上層が収束、中層
は下降流となり好天。低気圧だと下層が収束、上
層が発散、中層は上昇流となり悪天である。低気
圧の西に高気圧があると、収束域は始め下層に
あり、次第に高くなる。これを低気圧の軸の傾き
というが、軸が西に傾いていけば低気圧は発達
し、東に傾いていけば衰える。これは高層天気図
の見方の初歩である。一般に五〇〇mbの中層は発
散と収束の中間に当り、非発散となるので、時間
による変形が最も少い。これが五〇〇mb天気図が
週間予報に適している理由である。

温度 風の回転を温度という。その値は低気圧性
区域では正、高気圧性区域では負である。高層天
気図の等高線を地衡風近似で読みとることによ
り、チャーニーの数値予報を出すことができる。
五〇〇mbでは発散がゼロのため長期予報に適し、
パロトロピック(正圧)予報という。発散がゼロ
でない数層の天気図を用いて出す予報をバロクリ
ニック(傾圧)予報といい、今日では十一層を用
いている。(毎日新聞、毎土曜の朝刊参照)終。
出席者 赤羽昭夫、石井恵美子、小川肇、重村
清、高橋詢、中村純二、長谷田茂雄、前野十行、
松久秀夫、三栖寿生、なおプリント希望者は一二
〇円切手を同封し、大井会員まで(中村純二)

科学研究委員会

載った五つの現地小集会のうち、
私は米子沢に特に興味を覚え参加
させてもらった。

十一月三日の朝、米子沢右岸の
登山口には男女総勢二十二名の地
下足袋集団が勢揃いした。全体は
三つの班に分けられ私は第三班六
名の一人となった。

空は低くどんヨリしていたが一
班から順次米子沢に入って行っ
た。

三班のトップに立ったのは若手
の継松さん。はじめての連続する
滝は右岸を捲いた。再び沢に入り
しばらく遡上すると雪が現れる。
草鞋をつけて雪に印された先行班
の跡を追う。

二〇メートルと一〇メートルの
大滝を左岸を捲いて越すと、先行
班の足跡は右岸際の三メートルの
水しぶきに濡れた岸壁に向かっ
ていた。新井陽一郎リーダーは安全
性を考えたらしく、われわれを左
岸の高捲きに導いた。雪で捲んだ
笹を分け、横臥した樹木を潜り抜
けるトラバースは、安全の代償と
して時間を要求されることになっ
て、目的地の避難小屋に着いたの
は十五時となり、先発の二班は既
に下山したあとであった。

三十分休んで下山の途につく。
一二八メートル地点を過ぎた頃
から急速に夕闇が迫り、登山口に
着いた時はすでに真暗になっていた。

登山口には一班のリーダー中川

武さんが心配して待っていて下さ
った。中川さんによると先頭の二
班は十二時半、二班は十三時半に
避難小屋に着き、それぞれ一時間
の休憩をとって下山したとのこ
と。一班とわれわれ三班の間には
二時間半の隔りがあったことにな
る。

その晩私は集委員会の方々と一
緒に盈進学園の山荘に泊めて頂い
た。若い女性会員のつくって呉れ
た寄せ鍋を肴に、銘酒八海山の
一升壺が次々と空になった。

快晴に明けた四日は有志十一人
で金城山に登ったが、この山も米
子沢同様掛け値なしに満足だっ
た。

ところで、集委員会の方々は
現地小集会の計画を、会報とは別
に千六百通のダイレクトメールに
託して会員に呼びかけたとのこ
と。その熱意と努力を買って、今
後実施される計画には多数参加さ
れるよう私からもお願いすること
にしよう。

参加者(順不同) 砂田定夫、
林邦明、入沢郁夫、本間康之、小
池良吉、山口道弘、山田哲郎、新
井陽一郎、神山良雄、中川武、藤
田礼子、金子雅信、金子真美、継
松久美男、沢木由美子、他に会員
外七名 (山田哲郎)

会務報告

十一月理事会

図書受入報告

図書委員会

昭和 60 年 2 月分受入図書 (つづき)

22. 地図 "GLACIER MAP DARRAH-EISSIK-E BALA" Freytag-Berndt u. Artaria 1978 (ドイツ山岳会会長寄贈)
24. 地図 "HOHER HINDUKUSCH AFGHANISTAN" Kartographische Anstalt Freytag-Berndt und Artaria 1972
25. 地図 "TREKKING ROUTE MAP OF JAMMU & KASHMIR SHEET No. 1" 1979
26. 地図 "TREKKING ROUTE MAP OF JAMMU & KASHMIR SHEET No. 2" 1979
27. Mohan Motwani "Himalayan Mountaineering & Jourism Meet 1983" Indian Mountaineering Foundation 1983 (版元寄贈)
28. H.P.S. AHLUWALIA "ETERNAL HIMALAYA" INTERPRINT 1982 (購入)
29. 岳人友の会編 「山と詩と友と, 追悼・高須茂」 築地書館 1985 (伊藤博矢氏寄贈)

3 月分受入図書

1. 細田充著 「登山入門シリーズ 4 山の用具研究」 山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
2. 五来重著 「修験道史料集 II 西日本篇, 山岳宗教史研究叢書 18」 名著出版 昭和 59 (購入)
3. ヒーバー夫妻著 宮持優訳 「ヒマラヤの小チベット, ラダック」 未来社 1984 (訳者寄贈)
4. 草川啓三著 「近江の山」 京都山の会 1984 (版元寄贈)
5. 京都山の会編 「別冊青嶺 京都山の会創立 20 周年記念」 京都山の会 1984 (版元寄贈)
6. 酒田ヒマラヤ研究会編 「シムシャールからパミールへ, カラコルムの未知の峠」 酒田ヒマラヤ研究会 1984 (粕谷俊矩氏寄贈)
7. 吉野慎造著 「ヒムルン・ヒマールへの道, マナン街道旅日記」 萩の郷 1985 (著者寄贈)

8. 松本保彦編 「溪流フィッシング '85 別冊山と溪谷」 山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
9. 茶谷東海著 「梓会創立秘話」 梓会 1985 (著者寄贈)

4 月分受入図書

1. 泉欣次郎 千田健共編 「日本なんでもはじめ」 ナンバーワン 1985 (版元寄贈)
2. 花見朔巳編 「新編会津風土記 第一巻 (大日本地誌大系 25)」 雄山閣 1984 (購入)
3. 花見朔巳編 「新編会津風土記 第二巻 (大日本地誌大系 26)」 雄山閣 1984 (購入)
4. 花見朔巳編 「新編会津風土記 第三巻 (大日本地誌大系 27)」 雄山閣 1984 (購入)
5. 花見朔巳編 「新編会津風土記 第四巻 (大日本地誌大系 28)」 雄山閣 1984 (購入)
6. 花見朔巳編 「新編会津風土記 第五巻 (大日本地誌大系 29)」 雄山閣 1984 (購入)
7. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第一巻 大日本地誌大系 19」 雄山閣 1985 (購入)
8. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第二巻 大日本地誌大系 20」 雄山閣 1985 (購入)
9. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第三巻 大日本地誌大系 21」 雄山閣 1985 (購入)
10. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第四巻 大日本地誌大系 22」 雄山閣 1985 (購入)
11. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第五巻 大日本地誌大系 23」 雄山閣 1985 (購入)
12. 蘆田伊人編 「新編相模国風土記稿 第六巻 大日本地誌大系 24」 雄山閣 1985 (購入)
13. 広島三朗著 「登山入門シリーズ 6 地図と地形の読み方」 山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
14. 大登会編 「大登会年誌, 1959~1984」 大登会 1985 (購入)
15. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第一巻 大日本地誌大系 1」 雄山閣 1957 (購入)

(以下次号)

11 月 13 日 午後 6 時 30 分

本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、鳴原、橋本、大橋、浜口、梅野、高遠、鈴木、新井、大森、平井、長谷川、岡沢、絹川、村木、関塚各理事 松田、中村各評議員 金坂監事

委任 松永、太田各理事、宮下評議員

審議事項 一、O A 化委員会発足の件

二、O A 化を検討する。委員長飯野氏、委員若干名 承認

報告事項

一、常務理事会での検討事項報告

○事務の O A 化準備について

○財務関係等

二、委員会報告

財務、総務、海外、医療、学生部、フィルム、山日記、自然保護、図書、会報、集会、婦人懇談会、山岳編集、科学研究、山研、青年懇談会の担当理事から、行事関係報告と予定について説明。

三、その他

○山日記は今年は発行できない、来年度については企画中。

・ルーム日誌

十一月

6 日 (水)

集会委

8 日 (金)

常務理事会、片山全

9 日 (土)

平氏追悼会 中国トレンギング写

JAC70周年記念出版として好評10年…この機会に山の古典を味わってみませんか！

刻日本の 山岳名著

全18点22冊

解題書・特別資料付
企画・編集／日本山岳会
現金価格190,000円

新選刻日本の 山岳名著

全20点29冊

解題書・特別資料2点付
企画・編集／日本山岳会
現金価格175,000円

- 日本風景論 志賀重昂
日本山岳志 高頭 式編
日本アルプス 全四巻 小島鳥水
アルペン行 鹿子木貞信
日本アルプスと秩父巡禮 田部重治
山行 横 有恒
黒部峡谷 冠松次郎
山一研究と随想 大島亮吉
山と雪の日記 板倉勝室
雪・岩・アルプス 藤木九三
尾瀬と鬼怒沼 武田久吉
スウイス日記 辻村伊助
ハイランド 辻村伊助
氷河と万年雪の山 小島鳥水
北の山 伊藤秀五郎
山岳省察 今西錦司
- Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps
日本アルプス登山と探検
ウォルター・ウェストン
別巻 山の憶ひ出 全二巻
木暮理太郎 新装増補版
●解題書
覆刻日本の山岳名著解題
日本山岳会編
●特別資料
日本山岳会「會報」覆刻合本
第一号 第一〇〇号

- 名山圖譜 全三巻 谷文晁
迦多賀嶽再興記 播隆上人
信州鎗嶽夏縁起 播隆上人
石狩日誌 松浦武四郎
山岳紀行六種(私家版) 松浦武四郎
乙酉筆記 他五種
歐洲山水奇勝 全二巻 高島北海
富士案内 野中至
西藏旅行記 全二巻 河口慧海
山水無盡藏 小島鳥水
ヒマラヤ行 鹿子木貞信
銀澤に逝ける人々 東京帝國大學山邊隆雄
山岳美観 吉江喬松
山の繪本 尾崎善八
先蹤者 大島亮吉
白頭山 京都帝國大學白頭山邊隆雄
アルピニストの手記 小島鳥水
ナンダ・コット登攀 竹節作太
山に描く 足立源一郎
山岳礼拝(新編集) 中村清太郎
ウォルター・ウェストン
●解題書「新選覆刻日本の山岳名著解題」 日本山岳会編
●特別資料
日本山岳会「會報」第二〇〇号
播隆上人筆「鎗ヶ嶽繪圖」

大修館書店

●内容見本呈

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294-2221(大代表)

在庫僅少！

お知らせ

☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●講演会のお知らせ

より困難な状況下で、自分の肉
体をさらけ出し、一つの目的を達
成するスポーツの一つに、山登り
がある。しかし、異常環境下に肉
体を燃焼させた結果としての影響
は、未だ不明なところが多い。
ヒマラヤに遠征した人達の中で
最近記憶力がなくなったとか、氣
が入らないといったことを耳にす
ることがある。しかし、それが年
令的なものか、本人が知らないう
ちに高所障害を受け、その後遺症
なのかは、はっきりしない。

今回、日大の川久保先生グルー
プが、遠征前後の隊員の身体チェ
ックの中で、明らかに高所障害の
後遺症と考えられる一例を経験し
ている。この一例を中心に高所と

- 13日(水) 真交換会
14日(木) 理事会
15日(金) 図書委、科学委
19日(火) 会員懇談会
20日(水) 海外委
22日(金) 書評委
科学研究委

- 25日(月) 80周年会員展慰労会
26日(火) 総務委、OA化委
27日(水) 自然保護委、婦人懇
談会
高所登山委
今月の来室者408名

●会員懇談会

二月の会員懇談会は、『車窓の
山旅・中央線から見える山』の山
村正光氏にお越しいただき、車窓
からの山発見にまつわるエピソード
等をお話しいたします。去る
十二月一日および八日には国鉄主
催により山村氏のガイドによる
「車窓の山旅」が企画されました
が、満員のため参加できなかった
会員も多かったかと思えます。ル
ームでの「車窓の山旅」をお楽し
み下さい。なお、当日は近藤信行
氏にも出席をいただくことになっ
ております。

日時 二月十四日(金) 六時半

場所 本会ルーム

総務委員会・集会委員会

◎講演会と技術講習会

「幻の山と開けゆくブータン」

日時 2月5日(水)

午後6時半～8時半

場所 日本山岳会 ルーム

講師 千葉大学ナムシラ登山隊
吉永隊長 村木隊長

最後の桃源境ブータンと幻の山ナ
ムシラ初登頂をスライド付で語っ
ていただきます。

「アイス・クライミング」

日時 2月8日(9日)

今話題のアイスクライミングを基
礎から楽しみましょう。場所、費
用等詳細は、勝山まで(電七二九
一七四九)

青年懇談会・指導委員会

〔訂正〕 前号会報五ページの「山
岳図書を語るタベ」のテーマは山
岳写真集についてです。

昭和六十一年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(24) 四四三三

振替口座 東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂